

UXデザインから捉えた美術館の展示解説(2) 実証実験と理論的考察

関口, 洋美 / SEKIGUCHI, Hiromi / YOSHIMURA, Hirokazu /
吉村, 浩一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

67

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2013-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009434>

UX デザインから捉えた美術館の展示解説（2）

— 実証実験と理論的考察 —

吉村 浩一・関口 洋美

要 旨

前号に引き続き、美術館の展示解説の質を高めるための研究をユーザ・エクスペリエンス（UX）デザイン手法を応用して行った。本稿では、短大のお茶会での茶碗鑑賞において鑑賞者が語った感想を発話データとして収集した。そして、感想の中に作品（茶碗）の顕在的属性が現れる場合の特徴を捉えることを目指した。顕在的属性とは、形・色・大きさなど視覚的シーンの物理的属性のことで、15人から集めた言語データ中に、顕在的属性表現を50箇所検出した。そのうち45箇所（90%）は、「顕在的属性+潜在的属性」の組み合わせで用いられていた。これはかなり明確な一般式と言ってよい。しかし、顕在的属性の側に分類された記述の中にも潜在的属性性かなり混入しており、実際の感想文データを顕在的属性と潜在的属性に峻別することの難しさが判明した。顕在的属性と潜在的属性の性質を併せもつ発話内容を固定的にどちらかに分類するのではなく、研究のねらいに応じてダイナミックに位置づける必要があると考え、われわれは図3の図式を提案した。

はじめに

前号（吉村，2013）で提案した研究計画に基づき、2012年9月と10月に実証実験を実施した。本稿では、そこで得られたデータを吟味するとともに、それを材料に理論的考察を行う。本論はUXデザインという枠組みを踏まえて展開しているため、前号の繰り返しにはなるが、まずUXデザインとはどのようなものかの概略説明から始めたい。

UX（ユーザ・エクスペリエンス）とは、ユーザがある製品やシステムを使ったときに得られる経験や満足などの総体で、人に提供する物やシステムには一定水準の使用感が確保されるべきであるとの考えに基づき、国際標準化機構（ISO）が策定する国際規格（ISO 9241-210）で満たすべき基準が制定されている。その基準を満たすことを目標に行うのがUXデザインで、要するに、製

品やシステム使用時の経験や満足を高めるユーザ・インターフェイス作りのことである。本論ではこの枠組みを、美術館での展示解説の改善に援用する。それを踏まえ将来において、鑑賞者がよりよい鑑賞体験を味わえる解説作りを目指す。本研究では、上に示した「製品やシステム」にあたるものを「美術館での展示作品」、「ユーザ・インターフェイス」にあたるものを「その作品についての展示解説文」と見なすことになる。

アート鑑賞において鑑賞者が抱く印象を的確に言語表現してもらうには、それなりの仕掛けが必要である。本研究では、お茶会での茶碗鑑賞という、実生活において起こりうる状況を利用し、鑑賞表現の発話が自然に行える状況を確保した。短大茶道部のお茶会において、お茶を習い始めて日の浅い学生たち（後に記す統制条件では茶道部員でない学生たち）に、同じ短大の美術科の学生が制作した個性的な茶碗で立てられた薄茶を飲んでもらう。そして、自分の使った茶碗の感想を統制

条件と実験条件において語ってもらう。統制条件では、お茶会参加の経験そのものも乏しい学生に、茶碗について何の情報も与えない状態で、使った茶碗の感想を述べてもらう。それに対し、実験条件では、茶道部に所属する学生が、茶碗制作者からのメッセージ文（解説文）を読み、使った茶碗の感想を述べる。お茶会での茶碗鑑賞という自然な状況下で、統制条件・実験条件の参加者たちの感想は、顕在的属性と潜在的属性⁽¹⁾の現れ方において、どのような特徴を示すであろうか。

1. お茶会を利用した統制条件でのデータ収集

1.1 目的

お茶を習ったことのない一般の学生たちが、何の解説文も示されない状況で、使用した茶碗について感想を求められたときに語った感想を記録し、その特徴を把握することを目的とする。

1.2 方法

以下の各項の要領で、データ収集を行った。

1.2.1 実験実施日と実施場所

2012年10月6日午前中に行った。ふだんは一般公開されている大分県別府市の聴潮閣を、大分県立芸術文化短期大学の催し物の一環で借り切り、二階和室において茶道部主催で茶会を行った。

1.2.2 実験参加者

同日に聴潮閣において行われた美術科の学生たちの作品展示を、クラスメイトなど同短大の学生をはじめ一般市民も見学を訪れた。作品が展示されている部屋の隣室で、同短大茶道部主催のお茶会を、そうした見学者に呼びかけて6日と7日に合計3回実施した。本研究でデータ収集対象とした茶会は、6日午前中に行われた最初の茶会で、参加者は22名であった。そのうちの、同短大学生10名を統制条件の参加者とした。10名のうち4名は美術科の学生で、他の6名は国際文化学科

の学生であった。個々の参加者の所属学科と性別、それにお茶会参加経験の有無を、発話データ全文とともに、表1に示す。統制条件10名以外は一般市民の人たちで、茶道経験者や小学生を含む家族づれも含まれていた。その人たちの発話内容は、参考資料として利用するにとどめた（一部の参加者の発話内容を結果の項で引用する）。

1.2.3 実施手続き

お茶会に参加した22名は、同短大の美術科陶芸の学生・専攻生がこの日のために制作した茶碗を使って薄茶を頂戴した（全員に異なる茶碗を用いた）。統制条件の参加者には、自分が使った茶碗の感想を述べてもらうことをあらかじめ依頼し、全員から研究協力への同意を得ていた。そして、薄茶を頂戴した参加者から順に、自分の使った茶碗について感想を語ってもらう。その発話を、参加者の同意のもと音声録音した。なお、統制条件と次の実験条件は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の審査・承認を経て実施した。

1.3 結果と考察

表1には、参加者10名の関連属性に加え、茶碗の感想の逐語録を掲載した。発話はいずれも短いもので、全体的に見て国際文化学科の学生より美術学科の学生の方が、発話量はさらに短かった。

全体的特徴として、多くの参加者が、茶碗のもつ「顕在的属性」、すなわち知覚可能な物理的特徴に言及した。その部分を、参加者番号を付し以下に列挙する（頭の数字は参加者を区別するための参加者番号。そのあとに「一」とあるものは、発話中に顕在的属性が認められなかったことを示す）。

- 1 「柄（がら）」
- 2 「色」
- 3 ー
- 4 「手触りがすべすべして」、「すごく青っぽい色とか、茶色、黒と、まあカラ

表1 統制条件に参加した10名の学生の属性と発話内容

| 参加者番号 | 性 | 学 科 | 茶会経験 | 発 話 内 容 |
|-------|---|--------|------|---|
| 1 | 女 | 美術学科 | なし | 柄とか、芸術的な柄で、すてきだと思います。 |
| 2 | 女 | 美術学科 | なし | 色が渋くて、すごいすてきだと思います。 |
| 3 | 女 | 美術学科 | なし | エーなんだろう、意外と飲みやすく美味しかったです。 |
| 4 | 男 | 国際文化学科 | なし | エーと、回しやすく手触りがすべすべして気持ちいいです。見た目はすごい青っぽい色とか、茶色、黒と、まあカラフルで、俺は気に入っています。 |
| 5 | 男 | 国際文化学科 | あり | 私が今もっているのは、茶色い色の器です。異国の UK という国では、クールだと思います。 |
| 6 | 男 | 美術学科 | なし | この外側の模様が、いい感じに途切れていますね。でも、ここがつながっていてあまり好きじゃないです。 |
| 7 | 女 | 国際文化学科 | あり | すごいかわいいので、家に1つ欲しいなって思いました。これで、抹茶じゃなくコーヒーを飲みたいなって思いました。 |
| 8 | 女 | 国際文化学科 | なし | 柄が外側にしかないんですけど、落ち葉、紅葉とか楓の落ち葉みたいな形で、秋らしくていいなって思いました。 |
| 9 | 女 | 国際文化学科 | あり | えっと、器の中と外のどちらにも柄があるんですけど、使っている色は一緒なのに、中と外で印象が違うのがすごくいいなと思いました。 |
| 10 | 女 | 国際文化学科 | あり | 内側のきれいな紺色がすごくいいと思いました。持っている、ちょっと高級な気分になりました。 |

フルで」

5 「茶色い色」

6 「外側の模様」「途切れています」「つながっていて」

7 —

8 「柄が外側にしかない」

9 「器の中と外のどちらにも柄がある」「使っている色は一緒」

10 「内側の紺色」

10人中、3番と7番を除く8名が、使った器の顕在的属性に言及した。しかも、吉村（2012）において顕在的属性が用いられる場合の一般式と示唆された「顕在的属性+潜在的属性」という形式がとられていた。上の発話それぞれは、この図式に次のように当てはまった。

1 「芸術的な柄」+「すてき」

2 「色が渋い」+「すごいすてき」

4 「手触りがすべすべして」+「気持ちいい」、
「すごく青っぽい色とか、茶色、黒と、まあカラフルで」+「気に入っている」

5 「茶色い色」+「異国の UK という国ではクール」

6 「外側の模様」が「途切れている」+「いい感じに」

7 「外側の模様」が「つながっている」+「あまり好きじゃない」

8 「柄が外側にしかない」+「落ち葉、紅葉とか楓の落ち葉みたいな形で、秋らしくていい」

9 「器の中と外のどちらにも柄がある」「使っている色は一緒」+「中と外で印象が違うのがすごくいい」

10 「内側の紺色」+「きれい」「すごくいい」
このように、発話されたデータのほとんどの部分は、「顕在的属性+潜在的属性」の一般式に合致した。これは、先に見たように、10名中8名までが「顕在的属性」を感想の出発点に据えていたことに基づいている。

ただし、ここに示したデータでは、発話中のどの部分を顕在的属性と見なすかについてあいまいさを残す。たとえば、参加者1の顕在的属性に該

当する箇所を、最初は「柄」としたが、一般式に当てはめるときには「芸術的な柄」とした。また、参加者2に関しても、「色」を「渋い色」に変えた。「芸術的な」や「渋い」はむしろ潜在的属性に含むべき内容だが、ここでは一般式を単純化するため、あえて顕在的属性の側を含めた。この問題については、のちの実験条件データと合わせて考察したい。

10名の発話中、この一般式に当てはまらないのは、3人目と7人目の発言と、わずかに10人目の発言の一部に認められたにすぎなかった。それらを列挙すると、

- 3 「意外と飲みやすくて美味しかった」
- 7 「すごくかわいいので、家に1つ欲しいなって思いました」、「これで、抹茶じゃなくコーヒーを飲みたいなって思いました」
- 10 「持っている、ちょっと高級な気分になりました」

である。「意外と飲みやすくて美味しかった」というのは、茶碗でなく薄茶の味の感想と考えられるので、議論の対象から外せる。「すごくかわいいので、家に1つ欲しいなって思いました」では、「すごくかわいいので」に対する主語が省略されているが、補うとすれば「この茶碗は」であろう。しかし、それだけでは茶碗のどこが、あるいは何がかわいいのか分からず、「かわいい茶碗」という茫漠とした感想にすぎず、不十分な表現に留まる。「これで、抹茶じゃなくコーヒーを飲みたいなって思いました」も、この茶碗がコーヒーを飲むのによいと感じる根拠（おそらくはこの茶碗が有する何らかの顕在的属性によると思える）が示されていないため、やはり不十分である。「持っている、ちょっと高級な気分になりました」も同様である。本段落で取り上げたこれら4つの感想表現は、いずれも茫漠としており、感想表現の体をなしていない。作品を解説する展示解説文でもしこのような表現を用いたとすれば、それは不適切な解説と批判されるべきである。

茶道の経験の少ない10名の短大生、その中に

はお茶会への参加が初めての学生も6名いた。そうした学生たちが語った感想の多くは「顕在的屬性+潜在的属性」の一般式に適用のものであった。また、それに合致しない4つの感想は、鑑賞文としては不適切と判断できた。はたして、こうした統制条件下での発話データに対し、茶道を習っている学生が、しかも感想の手引きとなる解説文を提供された状況において、どのような発話データを示すだろうか。それを、次に見ていくことにしたい。

2. 実験条件、すなわち解説文が茶道部員に示された条件での発話内容

2.1 目的

茶道を習っている短大生に協力を求め、茶碗の作り手からの解説文を読むことにより、感想内容に一貫した特徴が見られるどうかを検討する。

2.2 方法

以下の各項の要領で、データ収集を行った。

2.2.1 実験実施日と実施場所

2012年9月17日に、大分市のコンパルホール2階茶室において行われた大分県立芸術文化短期大学茶道部の茶会時に行った。

2.2.2 実験参加者

大分県立芸術文化短期大学の茶道部に所属する学生のうち、コンパルホールでの茶会に出席した部員とその友人15名に参加してもらった。参加者は、全員女性であった。

2.2.3 茶会で使用した茶碗と解説文

この茶会のために同短大の美術科陶芸の学生が制作した十数点の茶碗のうち、茶道部の指導者と相談の上、使用する茶碗を5点選出した。それらは2名の陶芸の学生が制作したもので（1名が3点、他の1名が2点を制作）、お茶を点てたり飲んだりするための使用感が適切と思えるもので、

色や形が類似していないものを選んだ。ここでは、それらの茶碗を具体的に示すことはせず、「茶碗 A」から「茶碗 E」の番号で表記する。

使用する 5 つの茶碗それぞれに対し、茶碗制作者から、その茶碗の特徴や作成時の様子、自身による評価などを著者らが聞き取り、許可を得て音声録音した。録音された内容から、「潜在的属性」「顕在的属性」「背景情報」に該当すると思える部分をピックアップし、それぞれ文章にして 50 字から 100 字に収まる解説文を作成した（表 2 の

「解説文」の欄に全文を記載した）。聞き取りにあたっては、これら 3 カテゴリーのそれぞれに関する情報を語ってもらうように促したが、それぞれのカテゴリーに明確に分離できる解説文を作成することはできなかった。しかしそれは当然のことで、統制条件のところでも指摘したように、顕在的属性は単独で用いられることは希で「顕在的属性＋潜在的属性」という表現形式であることが一般的だからである。たとえば、茶碗 A の解説カテゴリー「顕在的属性」にある「釉薬の残り具合がい

表 2 実験条件の 15 名に対して示された解説文と参加者の発話内容

| 茶碗番号 | 参加者 ID | 解説カテゴリー | 解説文 | 発話データ |
|------|--------|---------|---|---|
| A | 1 | 潜在的属性 | 鮮やかな色で存在感がある。全体的に明るい色使いで、躍動感、軽快感もある。お茶の茶碗ふうの色使いではないが、若い人にも見やすい柔らかい茶碗にしたいと思った。 | 飲む前から【ピンクの色が白に映えて】かわいいなと思っていたんですが、飲んだあとにお茶を飲むにつれて【だんだんピンクが現れてきて下の模様が見えた】のがすごいかわいくおもしろかったです。また、【手触りがすごく柔らかく滑らかで、どこを触っても、なんかぼこぼこという感じがあった】ので、持っていて安心感がありました。 |
| | 2 | 顕在的属性 | 地と同じ色の白を使ったふちの釉薬（うわぐすり）の残り具合がいいと思う。絵柄は直感で描いたもので、何かを表そうと思って描いたわけではない。 | 第一印象が【白と赤ですかね】、すごく何かさわやかな印象でした。お茶を飲み終わったあとに、【底の方にまた赤色の柄が見えて】、すごくいいなあと思いました。で、その、絵柄が抽象的なものって書いてあるんですけど、なんか【雲のような、お花のようなというか、いろいろ想像ができて】、見て楽しかったです。 |
| | 3 | 背景情報 | 日頃はケーキ型の飾り物や小物入れを作っている。今回も茶碗の横でケーキ型の小物入れを作ったが、この茶碗の白っぽい地の色は、ケーキのクリームの色と同じにした。 | えーと、遠目で見たときに、【白とピンク系統の色で】すごいかわいらしいイメージがあって、【中に絵がある】ので、飲み始めてどんな絵柄があるのかわくわくしながら飲むことができました。自分のイメージとしては、桜とかカコイとか金魚系統のイメージだったんですが、ケーキのクリームとか、そういうのを聞いて、確かにその通りだなあとも思いました。で、茶道の静けさというよりは、若い人向けというか、あんまり静けさは感じられなかったんですが、すごい、見てて楽しいと思いました。 |
| B | 4 | 潜在的属性 | 形ではなく色で自分を表現しようと思った。軽快感がある。作った人の思いを込める芸術性だけでなく、デザイン性（使う人が感じる快感）もそなえている。 | 色で特徴を表現しているっていうのは、私もそう思いました。【見たときに一瞬、傘の模様かなと思ったりもしました】。【持った感じはやっぱり小さくって、私は手が割と小さい方なのでフィットしました】けど、男の人とか手の大きい人とかが持つとちっちゃいかなあという感じはしました。【全体的にというか、ぱっと見】、すごいかわいいなあと思ったし、【何の模様か、さっきは傘と言いましたが、こう中の模様を見てみたら】、実際何なのかなあって。なんか、偶然できた模様なのかなあとも思うし、こう、なんていうか、計画性も感じられるっていうか、【外側から見た模様と斜めから見た模様の印象が全然違うし】、すごいかわいいデザインだなと思いました。 |
| | 5 | 顕在的属性 | 白は静けさがあるっていうのだが、青を入れることによって、静けさに勢いが出る。それを狙って、青い釉薬（うえぐすり）をズバッと付けて、それがたれる感じにして勢いを付けた。 | えーと、最初の印象は、【少し小さいかなあという印象があった】んですが、【持ってみると】そこまでそんな違和感とか感じませんでした。それで、最初、【お抹茶が入っているときの模様と、飲んでいくとだんだん現れてくる模様が、模様というかこの青いうわぐすりがだんだん出てくる感じ】が非常に面白くて、飲みながら見ながらということを繰り返しながら楽しむことができました。実際も、【この青も】ものすごくきれいだし、【白とのバランスもすごいとれていて】すてきだなというふうに思いました。いいデザインだなと思います。 |
| | 6 | 背景情報 | とにかく色でインパクトを付けたいという思いで作った。これまでは小ぶりの筒型の湯飲みを中心に作ってきたので、どうしても小さくならずがちで、茶碗作りは手こずっ | 【白い色に深い藍色】がすごくきれいで、【流れている形は自然な形なのかなと思って】、それもきれいだなと思いました。文章にちっちゃめになりがちで書いてあったんですけど、【割とちょうどいい大きさで】、立てやすかったです。 |

| | | | | |
|---|----|-------|--|--|
| | | | た。やはり湯飲み作りとは勝手が違う。 | |
| C | 7 | 潜在的属性 | 少し冷たい感じがするが、躍動感もある。非日常的で、ふだん使いをためらうような個性と芸術性がある。 | 少し冷たい感じがすると説明にあるんですけど、別にそんなことは思わずに、けっこう【青とか抹茶の色とのコントラスト】がきれいでよかったです。 |
| | 8 | 顕在的属性 | 水色の部分は、水玉をイメージして、ひっかいて模様を付けた。下の高台が広いのは、粘土を上の方で切ったため。値や碗の形は、丸く膨らませずに、ずんどうにした。 | 最初の第一印象が絵がすごくきれいで、高台のところ広いと説明があるんですけど、私もそのように思います。【水玉模様】がとてもきれいで、【全体的に広がって】すごいきれいだと思います。 |
| | 9 | 背景情報 | いくつか作るとになり、いろんな形を作りたかったので、このような形もいかなと思って作った。見本に見せてもらった茶碗がこのような形であった。 | このお茶碗を私は立てさせて頂くのにも使ったんですが、【底が広くて】立てやすかったと思います。【模様が】すごく優しくて、【とろとろした感じで】かわいらしいと思うのですが、【ひっかき傷のところや底の部分などが少しとげとげして】、見た目の印象とは違って、【触った感じは】、少し攻撃的な印象がありました。【飲み口のところのとろとろした釉薬の感じや表面のとがったところや丸いところの傷など、対比があって】非常におもしろいお茶碗だと思いました。 |
| D | 10 | 潜在的属性 | やややさしさがあるが、緊張感もある。適度な大きさで、形も端正である。全体から夜空のイメージが感じられなくもない。 | 陶芸の知識はほとんどないので、偉そうなことは言えないんですが、やはりすてきな【色】だと思いました。学校の方で陶芸を履修したことがあるんですが、同心円とかの中心をとるのが器とかでも難しいし、女性の方が作られたと思うんですが、こんな【少し大きめの茶碗を作るのは】少し難しかったなあと思っていました。ほんと解説にあるとおりに、【夜空の感じが出て】すてきだなあと思いました。 |
| | 11 | 顕在的属性 | 深い青が美しい。正面をとるために、前面を白っぽくした。中に白っぽい点もあるんで、夜空のように感じられなくもない。正面の白っぽい色が、全体の暗さを和らげている。 | 最初、これを見たときに、【色合いがすごく淡い感じで、落ち着いた色合いで】、私は結構好きだなと思いました。茶道を始めて、まだあんまり経っていないんですけど、この茶碗は結構、【思ったよりも小ぶりの感じで】、持ちやすいと思いました。 |
| | 12 | 背景情報 | 見た目より軽く作りたいともって作った。「何だ、意外と軽いな」という意外感を目指した。正面の色よりも少し濃い目の白を茶碗の中にちりばめたつもりだったが、全然現れなかった。 | そうですね、【すごく深い藍色ですよ】、きれいな色で、これ立てるときにですね、少しやっぱり何ていうんでしょう、【底の部分が小さかったので】、少しぐらつくかなという印象があったんですけど、でも、その、解説文に白をちりばめたつもりだったってあるんですけど、【やっぱりちょっと出てないですよ、その色が】。でも、【藍色の部分と白い部分というのが】すごくマッチして、ちょっとこう、何ていうんでしょう、【紺じゃないですね、何ていうんでは、何色だろう、ちょっとこう、何とも言えない独特な色になってますよね】、そこがすごくいいと思いますよね。【少し触り心地というのか、ざらざらしているというのがある】ので、お客様にお出しするときに、布に少し引っかかってしまうかなあという印象は受けましたね。 |
| E | 13 | 潜在的属性 | やや固くシンプルだけれども、重厚感につながる存在感がある。暗い無彩色だが、全体はそれほど暗いわけではない。 | 今飲んだのは、【底が広くて】、【持ったら横に渦の模様とか手触りが】おもしろくて、よく見てもおもしろい作品だと思いました。 |
| | 14 | 顕在的属性 | 模様として彫った線はうすうす見えているが、釉薬（うわぐすり）を付けてから彫ったので、その線の効果はあまりでなかった。しかし、よく見ると、うすうすとした模様が釉薬のあととともに見えてくる。 | 【全体的にグレー】っていうので、【ちょっと比べててかりがあるように自分は感じて】、重厚感があるなあって感じがしました。【手触りもすごくつるつるして】、よかったなあって思います。ただ、そのなんていうんですがね、【底の部分（高台）がほかのお茶碗と比べて広かったんで、若干左手で支えるときにはみ出すのが、ほかのお茶碗と違うので】、違和感はあるかなあと思いました。手が小っちゃい人は逆に、ちょっと持ちづらいかも感じました。けど、【その高台が大きくてしっかりしているのも色がグレーっていうのもあって】、合ってる気がします。 |
| | 15 | 背景情報 | 黒泥という土を使って作った。黒い土を使うことで、力強さが出ると思った。一部にもっと黒い釉薬（うわぐすり）を付けたので、黒と黒とが重なるような模様が出ると思ったが、薬を間違えてしまったようで、その模様が出なかった。 | えーと、まず、【この暗い灰色とこの濃い抹茶の緑とが】すごく合っていて、きれいなあという印象を受けました。模様が上手く出なかったというふうを書いてあったんですけど、こういう【さりげない模様の感じが】、控えめな感じですよとお茶碗の感じとあっていう印象を受けました。あと、この【灰色の全体の色が】、すごくこのどっしりとしたイメージを持ってすごく重々しい感じで緊張感があって、すごくかっこいいお茶碗だなあという印象を受けました。 |

「発話データ」のうち、下線を施した箇所は「解説文」の言及部分、【 】で囲んだ箇所は顕在的属性表現と見なした部分。

い」という記述中の「いい」は潜在的属性というべき内容である。また、同じ茶碗 A の「潜在的属性」の解説文冒頭にある「鮮やかな色で存在感がある」という記述中の「鮮やかな色」は、顕在的属性と言うべき内容かもしれない。さらに、同じ制作者が3点または2点の茶碗を作っていたため、その茶碗に固有の「背景情報」を得ることも難しかった。こうしたことから、3種類の解説カテゴリーの区別は有効ではなく、当初設定した3つの解説カテゴリーは、データ分析にあたっては区別しないこととした。

2.2.4 実施手続き

お茶会開始時までに、全員に研究趣旨の説明を行い、書面にて研究協力への同意を得た。お茶を頂戴する前に、まず全参加者に次の質問に回答するよう求めた。質問内容は、これから使う茶碗について語る前の気持ちを尋ねるもので、「楽しそう」「難しそう」「緊張する」の3項目に対し、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」までの5点尺度上のいずれかに○を付けてもらった。

お茶を頂戴したあと、各人に応じたカード状の解説文を渡し、それを読んでから感想を語るように求めた。カードには、使用した茶碗の写真と3カテゴリーのいずれかの解説が書かれていた。そして、発話内容を音声録音した。5種類の茶碗のそれぞれに対し3カテゴリーの解説文を割り当てたため、15名の参加者にはすべて別内容の解説文カードを渡した。

録音終了後、再び5点尺度法の質問票を用いて、今度は茶碗についての感想を述べたあとの心情を尋ねた。質問内容は、「楽しかった」「難しかった」「緊張した」の3項目に加えて、「解説文は茶碗拝見に役だった」程度も尋ねた。

2.3 結果と考察

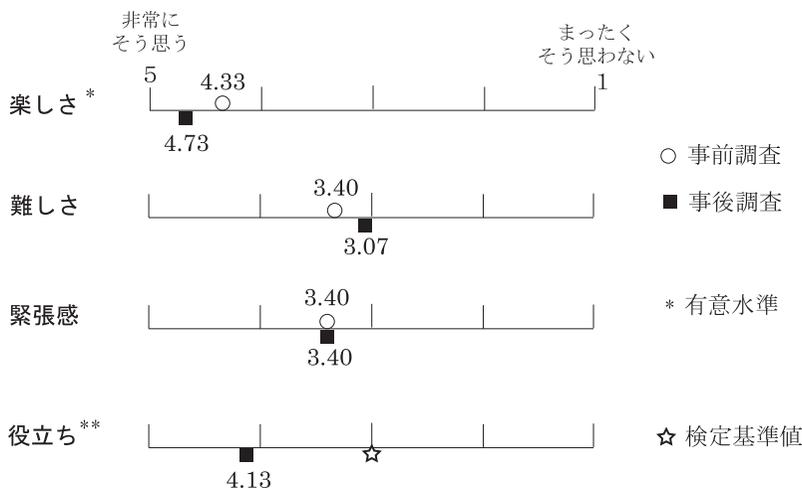
得られたデータは、参加者15名の茶碗拝見前後の心情評定値と音声録音された発話データであった。順に検討していきたい。

2.3.1 茶碗拝見前後の心情評定

各質問項目に対して評定値を点数化した（1点から5点を当てた）。可能なら「潜在的属性」「顕在的属性」「背景情報」のカテゴリーの違いによる効果も検討したかったが、方法の項で記した理由から、カテゴリー間の効果の比較は行わなかった。その際に記した理由に加え、次の理由も加わった。カテゴリー間比較を行おうとすると各条件の標本サイズ（ N の数）は5となる。この少なさでは、よほど強い効果がないと有意差検討に耐えない。3カテゴリーのデータをプールし $N=15$ とすることで、感想を述べる前と後の心情の比較の量的検討が可能となる。

図1は、茶碗拝見の前と後、すなわち茶碗についての感想を述べる前と後での15名の心情評定値の平均値を数直線上にプロットした図である。前後で比較可能な3種類の心情は、「楽しさ」「難しさ」「緊張感」だが、感想を語る前と後で有意差が認められたのは「楽しさ」においてのみであった（ $t_{14}=2.449, p=0.028$ ）²⁾。すなわち、感想を述べる前よりも感想を述べた後において、「楽しさ」の評価は高まった。これに連動して、「難しさ」や「緊張感」において、感想を述べた後で数値が下がることも予想できたが、そうした連動性は見られなかった。

また、図1に掲げた4つ目の心情、すなわち「役立ち」の評定は、高い値であった。「役立ち」は、「解説文が茶碗拝見に役だった」程度を問うもので、質問の性質上、実際に感想を述べた後にしか測定できない。その値が、平均評定値4.13というかなり高い値であった。この値の有意差検定を行うため、基準値を3.0（5と1のちょうど中間の値）に設定して、得られた平均評定値4.13がその基準値より有意に高いかどうかを調べた。用いたのは、1サンプルの平均値の差の検定である。その結果、 $t_{14}=5.264, p<0.01$ となり、両側検定1%水準で有意差が認められた。解説文の提供が、参加者たちに「役立った」との印象を与えた。



「茶碗の鑑賞に解説文はどの程度役立ちましたか？」という「役立ち」についての質問は、感想を述べたあとでのみ実施した。

図1 茶碗の感想を述べる前後の心情評定 (15名の平均評定値)

2.3.2 参加者の発話データ

次に、15名の参加者の発話データを検討しよう。先に掲げた表2の「発話データ」欄に、録音データから起こしたローデータを示しておいた⁽³⁾。15名もの発話データを分析対象とするので、内容に立ち入る質的分析は最小限に抑え、できるだけ量的分析を目指したい。

まず、茶碗の制作者の言葉を記した解説文の内容を、15名のうち何名が引用したかをみていこう。表2の「発話データ」中、それに該当する箇所を下線で示した。下線が施されたのは、15名中10名である。3分の2の人たちが解説文への直接的言及を行ったのである。ただし、字句通りの引用ではないケースもあった。たとえば、参加者ID2は、「何かを表そうと思って描いたわけではない」という解説文の記述を「絵柄が抽象的なものって書いてある」との文言に変えて言及したが、「って書いてある」という表現から、解説文への言及であることは明らかである。15名中10名、すなわち3分の2という割合が高いとは必ずしも言い切れないが、少なくとも、解説文を引用しつつ感想を述べる人が多数派だったという事実は指摘できる。「役立った」との評定値が高かったこととも合わせ、間違いなく解説文は貢献した。

次に、吉村(2012)で指摘した一般式「顕在的属性+潜在的属性」と「顕在的属性+背景情報」について、本実験で得られた発話データを用いて検討したい。この式の意味は、鑑賞文や解説文で顕在的属性に言及する場合は、それ単独ではなく、潜在的属性または背景情報と組み合わせて用いるのが一般的であるということである。

表2の発話データ中、【 】で囲んだ箇所が、筆者が顕在的属性と見なしたところである。参加者ID1の発話データを例に説明しよう。最初に登場する顕在的属性は【ピンクの色が白に映えて】である。これは、茶碗A(白地にピンクの太い刷毛線が施された図柄の茶碗)を見たり触ったり、あるいは口を付けたりしたとき直接的に知覚できることからである。この顕在的属性に「かわいいなと思っていた」という潜在的属性が加わり、解説文としてのメッセージ性が成立する。

15名の全発話データ中、【 】で囲まれた箇所、すなわち顕在的属性と見なされた箇所は、50箇所に及んだ。そのうち、「顕在的属性+潜在的属性」の形式をなすものは45箇所、9割を占めた。それに比べ、一般式のもう1つの形式である「顕在的属性+背景情報」と見られるのは、次の2箇所のみであった。

- ・【見たときに一瞬、傘の模様かなと思ったりもしました】（参加者 ID：4）
- ・【やっぱりちょっと出てないですね、その色が】（参加者 ID：12）

前者は、「形ではなく色で自分を表現しようと思った」という解説文にあった記述（背景情報）を受けての発言である。その背景情報が意味的主語となり、「背景情報＋顕在的属性」と逆順ではあるが、このパターンに属すると判断できる。後者も、「正面の色よりも少し濃い目の白を茶碗の中にちりばめたつもりだったが、全然現れなかった」という解説文（背景情報）の内容を「その色が」が受けたもので、やはり「顕在的属性＋背景情報」に属する。

残る3箇所は、吉村（2012）の一般式に合致しない。そこで、そうした事例が複数見られたことの理由を検討しておくべきである。考えられることは、このような記述は、意味をなす鑑賞文としては不適切な、いわば言葉足らずの表現である可能性である。もしそうなら、ここに見られた3つの表現は、未熟な表現として、検討対象から外すことができる。3つの事例を順に見ていこう。

- ・【持った感じはやっぱり小さくって、私は手が割と小さい方なのでフィットしました】（参加者 ID：4）であるが、女性の手で持った感覚的事実を述べたこの顕在的属性表現は、これに続く男の手の場合と対比されており、

それと対になり、メッセージ性をもつことになる。こうした対比的構造をもつ場合は、例外的に顕在的属性表現のみでの確な感想文・解説文として成り立ちうる。

- ・【少し触り心地というのか、ざらざらしているというのがある】（参加者 ID：12）では、「ざらざらしている」との顕在的属性の指摘は「布に引っかかるかもしれない」という評価につながっている。これは、茶事で使う茶碗を機能面から評価しており、絵画や彫刻など視覚のみの作品に対しては現れにくい事象である。
- ・【底が広くて】（参加者 ID：13）は、単独で記述されている顕在的属性である。本来なら、「だからどうなのだ」との記述が続くべきで、このままだと解説文の体をなさない。検討対象から外してよい事例である。

こうした例外的表現はあるものの、一般式として、顕在的属性は、潜在的属性あるいは背景情報（特に潜在的属性）と結びついてメッセージ機能を有すると言ってよい。

最後に、最も重要な、9割を占めた「顕在的属性＋潜在的属性」の検討を行っておきたい。この組み合わせのデータすべてを、表3に示しておく。表には、15名の参加者の発言に現れた顕在的属性の記述部分と、それと結びつく潜在的属性の記述を対にして関連づけた。

表3 実験条件参加者15名の発言のうち、顕在的属性と判断した記述箇所とそれに対応する潜在的属性と判断した箇所

| 通し番号 | 参加者ID | 顕在的属性と判断した記述 | 潜在的属性と判断した記述 | 備考 |
|------|-------|--|-----------------------------------|----|
| 1 | 1 | ピンクの色が白に映えて | かわいいなと思っていた | |
| 2 | 1 | だんだんピンクが現れてきて下の模様が見えた | すごいかわいくおもしろかった | |
| 3 | 1 | 手触りがすごく柔らかく滑らかで、どこを触っても、なんかほこほこという感じがあった | 持っていて安心感がありました | 触覚 |
| 4 | 2 | 白と赤ですかね | すごく何かさわやかな印象 | |
| 5 | 2 | 底の方にまた赤色の柄が見えて | すごくいいなあと思いました | |
| 6 | 2 | 雲のような、お花のようなというか、いろいろ想像ができて | 見てて楽しかった | |
| 7 | 3 | 白とピンク系統の色で | すごいかわいらしいイメージ | |
| 8 | 3 | 中に絵がある | 飲み始めてどんな絵柄があるのかわくわくしながら飲むことができました | |
| 9 | 4 | 全体的にというか、ぱっと見 | すごいかわいいなあと思った | |

| | | | | |
|----|----|---|---|------|
| 10 | 4 | 何の模様か、さっきは傘といましたけど、こう中の模様を見てみたら | 偶然できた模様なのかなあとも思うし、こう、なんていうか、計画性も感じられるっていうか | |
| 11 | 4 | 外側から見た模様と斜めから見た模様の印象が全然違うし | すごいかわいいデザインだと思いました | |
| 12 | 5 | 少し小さいかなあという印象があった | そこまでそんな違和感とか感じませんでした | |
| 13 | 5 | 持ってみると | | 触覚 |
| 14 | 5 | お抹茶が入っているときの模様と、飲んでいくとだんだん現れてくる模様が、模様というかこの青いうわぐすりがだんだん出てくる感じ | 非常に面白くて | |
| 15 | 5 | この青も | ものすごくきれい | |
| 16 | 5 | 白とのバランスもすごいとれていて | すてきだなというふうに思いました | |
| 17 | 6 | 白い色に深い藍色が | すごいきれい | |
| 18 | 6 | 流れている形は自然な形なのかなと思って | それもきれいだなと思いました | |
| 19 | 6 | 割とちょうどいい大きさで | 立てやすかった | 機能 |
| 20 | 7 | 青とか抹茶の色とのコントラスト | きれいでよかった | |
| 21 | 8 | 水玉模様が | とてもきれい | |
| 22 | 8 | 全体的に広がって | すごいきれいだと思います | |
| 23 | 9 | 底が広くて | 立てやすかったと思います | 機能 |
| 24 | 9 | 模様が | すごく優しくて | |
| 25 | 9 | とろとろした感じで | かわいらしいと思う | |
| 26 | 9 | 触った感じは | 少し攻撃的な印象がありました | 触覚 |
| 27 | 9 | 飲み口のところのとろとろした釉薬の感じや表面のところがたところや丸いところの傷など、対比があって | 非常におもしろいお茶碗だと思いました | |
| 28 | 10 | 色 | すてきな | |
| 29 | 10 | 少し大きめの茶碗を作るのは | 少し難しかったなあって思いました | 技術 |
| 30 | 10 | 夜空の感じが出てて | すてきだなと思いました | |
| 31 | 11 | 色合いがすごく渋い感じで、落ち着いた色合いで | 私は結構好きだなと思いました | |
| 32 | 11 | 思ったよりも小ぶりの感じで | 持ちやすいと思いました | 機能 |
| 33 | 12 | すごく深い藍色ですよ | きれいな色 | |
| 34 | 12 | 底の部分が小さかったので | 少しぐらつくかなという印象があった | 機能 |
| 35 | 12 | 藍色の部分と白い部分というのが | すごくマッチして | |
| 36 | 12 | 紺じゃないですね、何ていうんでしょ、何色だろう、ちょっと、何とも言えない独特な色になってますよね | そがすごくいいと思います | |
| 37 | 13 | 持ったら横に渦の模様とか手触りが | おもしろくて | 触覚含む |
| 38 | 14 | 全体的にグレー | 重厚感があるなあって感じがありました | |
| 39 | 14 | ちょっと比べててかりがあるように自分は感じ | | |
| 40 | 14 | 手触りもすごくつるつるしてて | よかったなあって思います | 触覚 |
| 41 | 14 | 底の部分（高台）がほかのお茶碗と比べて広がったので、若干左手で支えるときにはみ出すのが、ほかのお茶碗と違うので | 違和感はあるかなあと思いました | 機能 |
| 42 | 14 | その高台が大きくてしっかりしているのも色がグレーっていうのもあって | 合ってる気もします | |
| 43 | 15 | この暗い灰色とこの濃い抹茶の緑とが | すごく合っていて、きれいだなあという印象を受けました | |
| 44 | 15 | さりげない模様の感じが | 控えめな感じですごくお茶碗の感じと合っているという印象を受けました | |
| 45 | 15 | 灰色の全体の色が | すごくこのどっしりとしたイメージを持ってすごく重たい感じで緊張感があって、すごくかわいいお茶碗だなあという印象を受けました | |

特徴的なことは、用いられている潜在的属性の語彙がかなり重複している（貧弱な）点である。45 項目中、備考欄に「触覚」「機能」「技術」とある項目を除くと、35 項目が視覚に関する記述である。この 35 項目に対して用いられた潜在的属性は、「かわいい」「偶然性と計画性」「おもしろい」「さわやか」「いい」「楽しい」「わくわくする」「違和感」「きれい」「すてき」「優しい」「好き」「マッチする（合う）」「重厚感（重々しい）」「緊張感」「かっこいい」の 16 種類である。ほぼ 2 つずつ重複している計算である。しかも、16 種類には類似したものがかなりあり、多くが心情を表す言葉としては一般的で、限定性に乏しい⁽⁴⁾。それに比べると、備考欄に「触覚」「機能」「技術」とある 11 項目⁽⁵⁾ に対して潜在的属性として用いられた言葉の種類のは多さは興味深い。「安心感」「立てやすい」「攻撃的」「持ちやすい」「ぐらつく」「おもしろい」「よい」「違和感」と、11 項目に対し 8 種類のバラエティがあり、しかも一般的表現に留まらず、「立てやすい」「攻撃的」「持ちやすい」「ぐらつく」など限定的内容を有するものがいくつも含まれている。先の 35 項目は、視覚に関する記述であった。絵画や彫刻などアート作品の鑑賞は、通常、視覚に基づく。本実験で取り上げた茶会での茶碗は、見るだけでなく触覚が加わる上、お茶を飲むための機能も加わる。当然のことながら、それらも鑑賞対象になる。本実験では、図らずも視覚以外の鑑賞側面を捉えることとなった。食べ物番組でのリポーターが、「おいしい」という紋切り型の表現以外の味表現を求められるのと同様、視覚芸術に対する評価語である潜在的属性も、ありきたりでない限定的な表現を工夫していくことが、解説文作成に役立つものと思われる。

2.3.3 統制条件との比較

統制条件は 2012 年 10 月に実施した。それに対し、機会確保の都合から、実験条件はそれに先立つ同年 9 月の実施であった。すなわち、統制条件の結果を踏まえて実験条件を設定したのではなく、

実験条件実施後に、そのベースライン測定として統制条件を補う形となった。このような事情はあるものの、解説文が何も提示されず、しかもお茶会参加の経験にも乏しい学生の発話とどのように違ったのかを比較しておきたい。

全般的に、実験条件に比べ統制条件の参加者の発話の方が短かった。統制条件の参加者の多くは、「茶碗についての感想を何か述べてください」との要請に対し、ほぼ 1 文だけで応答した。それでもなお、「顕在的属性＋潜在的属性」の一般式に適う表現が多く、潜在的属性の種類も、「すてき」「いい気持ち」「気に入った」「クールだ」「いい感じ」「好きじゃない」「かわいい」「欲しい」「いい」「高級な気分」と、実験条件に劣らぬバラエティを示した。

もし、1 文の感想のあと、実験者から「他にはありませんか？」と発言をさらに促されていたなら、実験条件参加者の応答と変わらない量の発言が得られたかもしれない。しかし、そうした介入は行わず、自発的に浮かべた自然な感想を収集するように努めた。今回の結果を受け、今後は必ずしも茶道やお茶会の経験者でなくても大人からなら、アート鑑賞に関する言語データは収集可能との確証を得た。逆に、ベテランの茶道家が発しがちな様式的で作法に則った感想よりも、素朴で自然な感想文の収集が期待できる。

ちなみに、統制条件を行った聴潮閣でのお茶会では、本研究で収集対象とした短大生の他にも、12 名の一般市民の人たちが参加していた。その中には小学校中学年の女子が 1 人いた。また、茶道を長くたしなんでいるベテラン女性も 1 人含まれていた。小学生女兒の発話は「みんなと形が違っておもしろかった」との 1 文であった。「おもしろかった」は形式的には潜在的属性の記述のようにみえるが、この文を素直に解釈すれば、この「おもしろい」の意味は、対象である茶碗のおもしろさではなく、使った茶わんがさまざまだったことが「おもしろかった」と言っており、対象とした茶碗の感想とは言えない。1 例だけから断定的なことは言えないが、小学校中学年程度の年齢

層の対象者から鑑賞表現を得ることは難しいかもしれない。逆に、茶道を長くたしなむベテラン女性の発話データは、次のようであった。「とても手触りがよくて馴染む感じで、重さの方も心地のいい重さで、とても使い勝手がいいお茶碗だと思います。たぶん意識的にだと思うんですけど、釉薬の掛かっていない素焼きの部分があって、ちょっとだけお茶をたしなむんですけど、お茶の時にこういう素焼きのお茶碗ってあまり使わないと思うので、何かこうちょっとまた珍しくて、感じが変わっておもしろいと感じました」。「馴染む」「心地のいい」「たぶん意識的にだと思うんですけど」「何かちょっとまた珍しくて」「感じが変わっておもしろい」など、さすがに拝見慣れた心配りの行き届いた表現が随所にみられる。逆に言えば、様式化された表現が多用されており、本研究で狙っている自然で素朴な鑑賞文の収集には不向きかもしれない。本研究の参加者であった茶道部の学生たちは、茶道での茶碗拝見時の様式化された表現に染まっていない感想を多く発言してくれた。そこには、鑑賞対象の茶碗がいわゆる芸術品でなく、自分たちと同じ短大の美術科の学生、すなわち仲間が作ったものであるという水平目線で鑑賞できたこともプラスに働いたと言えよう。

3 総合考察

3.1 どこまでが顕在的属性か

統制条件と実験条件の「結果と考察」でともに指摘したように、発話データのどこまでが顕在的属性表現かを仕分けることは容易でない。特に、「顕在的属性+潜在的属性」の記述に対し、どこまでが顕在的属性でどこから潜在的属性かを切り分ける作業は難しい。前節のデータ整理に際しては、ともかく顕在的属性をできるだけ広くとるという方針で臨んだ。

表3の具体例で説明しよう。通し番号16では、「(青と)白とのバランスもすごいとれていて」を顕在的属性とした。それが、「すてきだ」という潜在的属性と結びつき、「顕在的属性+潜在的属

性」の一般式に合致すると判断した。しかし、「(青と)白との配置のバランスがとれている」という表現中の「バランスがとれている」との受け止め方は、すでに潜在的属性に属する内容と見なすこともできる。1節と2節のデータ分析にあたっては、このような曖昧さ・多義性があるときにははできる限り多くの部分を顕在的属性に含める方針で、データ整理の一貫性を保った。ただし、この方針は、「顕在的属性+潜在的属性」という一般式を抽出するのに必ずしも都合よいとは言えない。実際の作品解説においては、「(青と)白との配置のバランスがとれている」という記述で終わる解説も少なくないと考えられるからである。いわゆる、「語りすぎない展示解説文」である。そうすると、顕在的属性の単独表現となり、一般式に反することになる。本研究のデータにおいては、「(青と)白との配置のバランスがとれている」+「すてきだというふうに思いました」という整った形の表現が多かったため一般式を保てたが、顕在的属性を広くとることは、「語りすぎない展示解説文」にあっては、一般式に反した解説の割合を高めてしまう。そうした危うさを抱えているにもかかわらず、本研究で顕在的属性の記述をできるだけ広くとりえたのは、得られたデータの多くが、さらにそのあとに明白な潜在的属性記述を従えていたからである。

この問題は、顕在的属性と潜在的属性が、心の働きのどの部分を担うのかという、より広く本質的で心理学的な問題へと結びつく。その問題には次節で取り組むこととし、ここでは、どこまでを顕在的属性と見なすべきかを考えるための問題提起を、表3からもう少し洗い出しておきたい。

通し番号27は、「飲み口のところのところがの傷など、対比があって」(顕在的属性)+「非常におもしろいお茶碗だと思いました」(潜在的属性)という、一般式に合致する表現と見なした。しかし顕在的属性に含めた「とろとろとした」や「対比がある」は、それ自体が潜在的属性に属する心の働きとも見なしうる。先ほどの「バランス

感」と同様、「対比感」も潜在的属性と考えられる。また、通し番号 31 では、「色合いがすごく渋い感じで、落ち着いた色合いで」を顕在的属性とした。しかし、ここでもまた、「渋い感じ」「落ち着いた色合い」と感じることで、潜在的属性と言えなくない。にもかかわらず、本研究では、上で述べた理由から顕在的属性を広くとる方針で臨んだ。

そもそも潜在的属性と顕在的属性を切り分ける提案をした Marković & Radonjić (2008) 自身、両属性をどう定義づけていたのであろうか。彼らによれば、両者は密接に関連するものの、顕在的属性は絵画の構成的領域、潜在的属性は表象的領域という別の面を担うとした。言い換えれば、顕在的属性は物理的性質で、潜在的属性は知覚者自身がシーンの中に投入する主観的性質だとする。この切り分け方に従えば、「バランス感」「対比感」「渋い感じ」「落ち着いた色合い」はことごとく潜在的属性に含むべきである。しかし、彼らが顕在的属性とした 25 項目と潜在的属性に含まれるとした 43 項目と照合すると、これら 4 つの表現は、いよいよどちらとも決めにくくなる。まず、色が「対比的」であると捉えることは、彼らの指摘する顕在的属性の 1 項目「color-contrast—color-gradient」に含まれる。それに対し、「バランス感」は潜在的属性の 1 項目「balanced—unbalanced」に含まれる。また、「落ち着いた色合い」となると、一致する項目はどちらの属性にもなく、近いところで、顕在的属性中の「lightness contrast—graduated lightness」、潜在的属性中の「strong—weak」がある。さすがに、「渋い感じ」となると、欧米の尺度には見つからず、どちらの属性とも決めがたい。これらのことから、「対比的」は顕在的属性、「バランス感」は潜在的属性、「落ち着いた色合い」と「渋い感じ」は両者の境界領域にあるように思える。なお、これら微妙な表現の実際の使われ方を見ていくと、どちらに含めるべきか、ますます決めがたくなる。同じ内容の表現でも、名詞（顕在的属性）にかかる形容詞的に用いられる場合と主語に対する述語として用

いられる場合があり、表現内での重みが異なる。そこで本研究では、ほとんどのケースで、これらの言葉のあとに明確な潜在的属性表現が控えていたとの理由から、顕在的属性の範囲を広くとり構造の単純化を図った。

上に示した「落ち着いた色合い」が顕在的属性と潜在的属性のどちらにも含まれることから察せられるように、Marković & Radonjić (2008) の整理した顕在的属性と潜在的属性は、客観（物理的）と主観という明確な切り分けに収まらない曖昧さをもっている。彼らの行った分類が抱えるこうした問題点を中心に、両属性の関係を、節を改めより大局的観点から検討していくことにしたい。

3.2 顕在的属性と潜在的属性の守備範囲

顕在的属性は鑑賞対象物の物理的特徴の記述、潜在的属性はそれを受けて心に抱く主観的印象の記述であるという理解から、本研究は出発した。このことは、この分類を提案した Marković & Radonjić (2008) の考え方もあった。しかし、本研究で実際の鑑賞文の分析を進める中で、この単純な理解は、作品鑑賞文や作品解説文の分析を行う上で必ずしも明快な基準とはならず、場合によってはむしろ混乱を引き起こすことが分かった。

この危うさは、次に示すように、Marković & Radonjić (2008) が顕在的属性と潜在的属性を用いて絵画作品の評価を行ったデータにおいて、すでに現れていた。彼らはまず、21 名の学生にいくつかの絵画を見せそれらの絵を対象に、顕在的属性を構成する 25 項目の評定を求めた。そして得られたデータ行列を主成分分析し、設定した基準値以上の値を示す因子として、形 (form)・色 (color)・空間 (space)・複雑さ (complexity) と命名することが可能な 4 因子を抽出した(本研究の前半をなす吉村, 2012 の表 2.1 最右列参照)。興味深いことに、これら 4 因子は視知覚の主要側面と密接に関連していると、彼らは言う。彼らはまた、潜在的属性を構成する 43 項目に対しても主成分分析を行い、均斉調和 (regularity)・

弛緩 (relaxation tone)・快感 (hedonic)・覚醒 (arousal) の 4 因子を得た。こうして得られた顕在的属性 4 因子と潜在的属性 4 因子の相関を調べたところ、形 (顕在的属性) と均斉調和 (潜在的属性) の間に $r=+0.80$ という極めて高い正の相関を認めた。ほかにも、形と快感 ($r=+.42$)、空間と均斉調和 ($r=+.52$) に有意な正の相関が認められた。Marković & Radonjić は、形と均斉調和の間の高相関を、図形によさ (顕在的属性) と絵画構成によさ (潜在的属性) の重複と評した。両属性には、multicolored—unicolored という同一項目を含むことをはじめ、類似した項目が目立つ。彼らの行ったこの分類は、顕在的属性が知覚そのものと密接に関連していることを証拠立てる (得られた顕在的属性の 4 因子が視知覚の主要な 4 側面と密接に関連することの指摘) 一方で、顕在的属性と潜在的属性もまた密接に関連する (形と均斉調和の間の $r=+0.80$ という極めて高い相関など) ことも示す。知覚内容と顕在的属性が密接に関連し、顕在的属性と潜在的属性も密接に関連する。要するに、知覚内容・顕在的属性・潜在的属性の三者は密接に関連 (大いに重複) しているのである。

顕在的属性と潜在的属性の重複は、本研究の前半 (吉村, 2012) で掲げた顕在的属性と潜在的属性の位置関係図である「知覚から始まるアート鑑賞プロセス図」の再検討を促すことになる。その図をもう一度、図 2a として再掲する。この図の意味するところは、顕在的属性と潜在的属性は、それぞれ知覚に近い領域と心の奥深い領域を守備範囲とし、両属性は知性面と感性・感情・イメー

ジ面をともに含んでいるとすることである。両者には、同じ名称の項目 (multicolored—unicolored) や類似項目が含まれることから、重複部分の存在は明らかだが、図 2a では両者の重複をわずかとし、あくまで横軸上での位置の違いから両属性には明確な差異があるとした。しかしながら、本研究での検討は、三者が密接に関連 (大いに重複) していることを指し示すこととなった。

この行き詰まりを打ち破るため、図 2a のモデルに修正を加えたい。ふたたび、表 3 の通し番号 1 を引き合いに出そう。「ピンクの色が白に映えて」と色の対比に言及しているが、「映えて」との記述は、顕在的属性とも潜在的属性とも取りうる。しかしながら、本研究では、顕在的属性をできるだけ広く捉えるとの方針から、「映えて」を顕在的属性に含めた。そのあとに、「(それが) かわいいなと思っていた」(潜在的属性) と続くことから、「映えて」を顕在的属性の側に含めても「顕在的属性+潜在的属性」の一般式を保てたからである。しかし、「ピンクの色が白に映えている」で記述が終わる感想文や解説文も少なくない。そうなれば、一般式を満たすため、今度は「映えて」を潜在的属性の側に含める必要が生じる。Marković & Radonjić (2008) は、感情的・情動的な属性 (あるものの方が他のものより楽しそうに見えたり、興味深く感じたりする) や、客観的には同じように静止していても水平線より斜め線の方が躍動的に感じられるなどの疑似物理的性質も潜在的属性に含まれるとした。彼らの説明に従えば、ここでの「映えて」は疑似物理的性質として潜在的属性に含めるべきである。

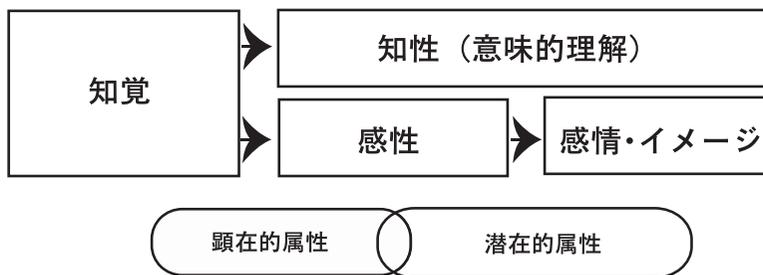


図 2a 吉村 (2012) で提案したアート鑑賞プロセス・モデル (再掲)



図 2b a 図の対案としてのアート鑑賞プロセス・モデル

こうしたあいまいさを克服し、現実の鑑賞文や解説文の分類を行うため、新たに図 2b のモデルを吟味したい。このモデルでは、顕在的属性と潜在的属性の違いを、横軸上ではなく縦軸上に置くことになる。すなわち、顕在的属性は意味的理解を担う知性的側面を、潜在的属性は感性・感情・イメージという非知性的心的機能を守備範囲とする。先ほどの例で説明すると、「映えて」という表現には、白い地にピンクの図柄が塗り分けられているという物理的事実を指摘するとともに、その色使いから「かわいらしい」という感性・感情的心情を抱くことまでが含まれている。したがって、「映えて」をどちらかの属性に分類するのではなく、この表現に含まれる知性的側面を顕在的属性に、感性・情緒的側面を潜在的属性に帰属させる。言い換えれば、「映えて」という単一表現が顕在と潜在の両属性を併せもつとするのである。そうすれば、通し番号 1 の鑑賞文は、「（塗り分けられた）ピンクの色が白に」（顕在的属性）+「映えて」（顕在的属性・潜在的属性）+「かわいい」（潜在的属性）となる。顕在的属性としての「映えて」は、白い地の色にピンクが塗り分けられた配色であるとの知的理解を示し、潜在的属性としての「映えて」は、その配色が心地よい感性的・感情的気分を引き起こすことを示す。使った茶碗から何を知覚するかについては無限の可能性がある。その中で、「ピンクの色が白に映えて」いる様子に注目することは、知性的心の働きであると同時に、すでにその様子に心が動き、感情がかき立てられていることも示す。「映えて」という表現がこうした心情を背負っているなら、顕在的属性と潜在的属性の性質をともに有すると見なすことはむしろ当然で、図 2b のモデルがもっともら

しく思える。

しかし、図 2b のモデルには大きな弱点がある。言葉で表現された鑑賞文や解説文を、表現された文節単位で顕在的属性か潜在的属性のどちらかに切り分けられなくなる点である。図 2b のモデルは、実際に発話された文の構成要素による属性分けという実用的価値を失ってしまう。

3.3 UX デザインの観点を取り入れた結論的見解

図 2a に代え、図 2b のモデルを検討した。しかし、本研究では、図 2a のモデルをベースに、お茶会での鑑賞文の評価を行い、表 3 のような量的評価を経て、鑑賞文での「顕在的属性+潜在的属性」という一般式の当てはまりのよさを示してきた。鑑賞の場合とはもかく、作品解説は文章表現が基本である。したがって、表現された言葉を基準に解説文を評価できなければ、実用性、すなわち UX デザインのための客観的評価法を確立したとは言えない。

叙事詩と叙情詩という分類がある。叙事詩とは、いわば本稿で扱うところの顕在的属性だけで記述された詩である。しかし、その表現の中に潜在的属性のメッセージが底流するからこそ、詩としての価値が生じるはずである。現実問題として、叙事詩の中の潜在的属性を同定するという作業は文学的センスに委ねるべきで、科学には手強すぎる。科学的方法で及びうことは、言語表現された各部分をどちらかの属性に分類し、目に見える形での計量化・定式化を図ることである。そこで、図 2b ではなく図 2a のモデルへの揺り戻しが生じる。理屈の上では図 2b のモデルが適切なようだが、実用上は図 2a のモデルを用いるというのでは、

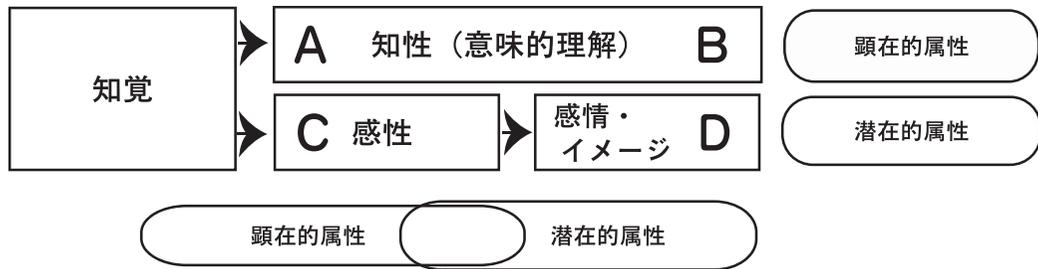


図3 最終的に提案するアート鑑賞プロセス・モデル

納得しがたい。ただし、図2aが示す、顕在的属性より潜在的属性の方がより内的な心的過程に係わるという基本的考えは間違っていない。

そこで、最終案として、図3のモデルを提示する。図2のaとbが顕在的属性と潜在的属性の関係を補完的に捉えているという上で行った検討を受け、顕在的属性と潜在的属性は水平軸上と垂直軸上にもともに位置づけられるとする。図中、Aのあたりは両軸の顕在的属性が重なる(交差する)ところで、純粋な顕在的属性位置と言える。逆にDは、両軸の潜在的属性が重なるところで、純粋な潜在的属性である。これらに対し、Bは、事実あるいは知覚可能なことがらを記述しているが、内的な心の働きを含んでいる。先の説明を用いれば、叙事詩がもつ诗情のようなものである。本研究のデータ例を引けば、表3の通し番号3「手触りがすごく柔らかく滑らかで、どこを触っても、なんかぼこぼこという感じがあった」の「柔らかか」「滑らか」「ぼこぼこという感じ」という表現である。これらは知的に把握可能な茶碗の性質を指摘しているが、その表現にはその特徴に対する感性・感情的思いが込められている。一見、事実を記述しているに過ぎない表現の中に感性を込めるといふ叙事詩的表現と言える。最後にCのあたりは、表3の通し番号1「ピンクの色が白に映えている」の「映えている」にあたる位置である。「映える」という状態は心情を反映する表現、すなわち潜在的属性と見なせるが、知覚内容を言葉で表そうとすれば自然かつ常套的に使いがちな表現である。Aは顕在的属性としてDは潜在的属性として安定しているのに対し、BとCは基準次第でどち

らにもなりうる。本研究の実験参加者から得られた言語データではDに相当する表現が後に控えていたため、BやCに該当する部分を顕在的属性の側に含めることができた。すなわち、安定した潜在的属性表現が続いたため、曖昧な部分を顕在的属性に含めてもよかった。

ところで、鑑賞文や作品解説では、Dの「おもしろい」「美しい」「かわいい」「好き」「すてき」「すごい」「驚く」という概括的表現より、その作品のもつ個性的魅力を言い表す表現が大切である。それを担うと期待できるのは、DよりむしろBやCである。何もかも「かわいい」と表現する世相が指摘されているが(たとえば四方田, 2006)、それが象徴するように、上に列挙した「おもしろい」以下の潜在的属性表現は多用され、陳腐化し、対象の特徴を個性的に表現していない場合が多い。それに対し、BやCは抱いた感性や心情を具体的・個性的に捉える力を有している。本研究で、もしBやCを潜在的属性の側に位置づけていたなら、本研究で行ったような定量的検討はできなかったであろう。しかし、そうした形式的・定量的分析によっては届きにくい内容的吟味は深まったかもしれない。当然ながら、それと引き替えに潜在的属性の記述内容が多様化し、量的分析は行いにくかったであろう。

重要なのは、顕在的属性や潜在的属性のどの面に焦点を当てる検討を行おうとしているかを、あらかじめ自覚してかかることである。それに応じて、BやCの扱い方は変化しうる。本稿のように、内容的分析に先立ち、「顕在的属性+潜在的属性」という形式的・一般性の裏づけを目指すなら、

B や C の中身, すなわち固有性や具体的心情の個性に立ち入らないことが適切である。それに対し, B や C の内容的豊かさを捉え, 解説文作成にあたっての豊かなボキャブラリ開発を目指すなら, B や C のもつ潜在的属性に焦点を当てること有効であろう。今後は, 最終バージョンとして提案した図3のモデルを, 研究目的に応じてダイナミックに捉えることによって, 作品のもつ物理的事実とそれらにより引き起こされる心の動きを捉えるための指針として柔軟に活用していきたい。

謝 辞

本研究は, JSPS 科研費 24520179 (平成 24~26 年度基盤研究(C)「絵画の中に現れた顕在的属性を作品解説と鑑賞教育に生かす」) の助成を受けて行った。実験に参加して下さった大分県立芸術文化短期大学茶道部の皆さんと, 茶道部の指導者で本実験の実施にあたって快く支援と協力をしてくださった久々宮泰子様にお礼申し上げます。また, お茶会で使用するためのオリジナリティ豊かな茶碗を制作して下さった同短大美術科陶芸の学生の皆さんと制作のご指導をされた美術科久保木真人教授(当時)にお礼申し上げます。そして, 茶道部及び美術科の関係者の皆さんとの交渉に尽力いただいた本科研の研究協力者である大分県立芸術文化短期大学永田道弘准教授にお礼申し上げます。

註

- (1) これらの用語については前稿で詳しく説明したが, 端的に言うとも, 「顕在的属性」とは作品に物理的に現れている知覚可能な属性のことで, 「潜在的属性」とは作品から受ける印象や感情など作品からは直接的に知覚できない属性のことである。
- (2) 念のため, このデータに対してノンパラメトリック検定も行った。Wilcoxon の符号付き順位検定の結果, 「楽しさ」においてのみ, $Z=2.121$, 漸近有意確率(両側)=0.034 の有意差が認められた。
- (3) 代名詞表現を, それが指し示す言葉に置き換えたり, 「ええーと」などの感嘆詞や独立語などの冗語は削除した。
- (4) 「偶然性と計画性」(通し番号 10) は例外である。この表現には, 固有性がある。後にも指摘するように, このような固有性をもつ潜在的属性表現を尊重することが, 今後の解説文作成にとっては重要になると考えられる。
- (5) 通し番号 36 は, 「触覚含む」とあることから視覚グループと触覚グループの両方に含めた。

参考文献

- Marković, S. & Radonjić, A. 2008 Implicit and explicit features of paintings. *Spatial Vision*, **21**, 229-259.
- 四方田犬彦 2006 「かわいい」論 筑摩書房
- 吉村浩一 2012 絵画に顕在するものを展示解説文に生かす意義 展示学, **50**, 042-051.
- 吉村浩一・関口洋美 2013 UX デザインから捉えた美術館の展示解説 (1) — 問題提起と研究計画の設定 — 法政大学文学部紀要, **66**, 63-77.

Commentaries on Art Gallery Displays
Conceived with User-Experience Design Part II:
A demonstration experiment and theoretic considerations

YOSHIMURA Hirokazu and SEKIGUCHI Hiromi

Abstract

As a continuation of our paper in the last issue (Yoshimura & Sekiguchi, 2012), we conducted a study to seek improvement in the quality of explanations to be attached to exhibits in art museums by utilizing the method of the User Experience (UX) Design. In this paper, we collected comments by those who had appreciated an antique tea cup at a tea ceremony in a junior college as data. Our aim was to find the characteristics of how the explicit features of the work (tea cup) appeared in such comments. The explicit features are physical features of the visual scene, such as shape, color, and size. In the language data gathered from the comments by those 15 people who attended the tea ceremony, we detected 50 expressions of such explicit features. Forty five (90%) of the expressions were combinations of the comments on both explicit and implicit features. It may be said that this is a considerably general characteristic. However, because some expressions that have been classified as expressions on “explicit features” are in fact, at the same time, expressions on “implicit features,” we find that it is difficult to distinguish between the expressions of explicit and implicit features in such comments. Because it is necessary to view comments that are expressions of both explicit and implicit features more dynamically to respond to the aim of the study rather than statically classify them into two different categories, we propose the schema of Figure 3.